

「そのままのキミで。」

浜松市立湖東中学校 三年 徳増 真大

これは「共感」だろうか。それとも「反発」だろうか。様々な感情が私の体を駆け巡り、一度読んだだけでは整理がつかなかった。

本書の主人公は、自分に自信が持てない、臆病で孤独なハリネズミだ。彼は、様々な個性溢れる動物を自分の家に招待しようとするのだが、その招待状の最後にこんな言葉を書き足してしまう。「でも、だれも来なくてもだいじょうぶです。」と。

手紙を書き終えたハリネズミは、動物たちが訪ねてくることを想像する。彼らは自分の家で何をするだろうか。自分はどんな対応をするだろうか。そんなとき、彼はいつもネガティブに考えて、不安になり、どうかその動物が訪ねてきませんようにと願ってしまう。そして、結局ハリネズミは、ついに手紙を出せずに終わるのである。

ハリネズミは、なぜ、こんなにもネガティブなのか。それは、ハリネズミがコンプレックスの塊だからである。自分の弱さも、その弱さを頑強に守る強いハリも、嫌だった。こんな自分が、他の動物たちから愛されるわけがないと思っっているのだ。だから、全てに消極的なのである。否定されるくらいなら、最初から求めない方がよいと。

その心情は、私には「共感」できる。私も、大きなコンプレックスを抱えていたからだ。

幼い頃の私は吃音症で、伝えたいことがうまく言葉にならないことが多かった。それがコンプレックスで、周りの人と関わるのが苦手だった。なかなか言葉が出てこないから、話すのに時間がかかる。相手に迷惑を掛けてしまうのが嫌だった。また、吃音症であることを知

られるのが恥ずかしくもあった。他の人と自分から関わろうとせず、殻を閉ざしてしまった私は、ほとんど友達ができず、クラスでも居場所を見つけれずにいた。

こんな私には、ハリネズミの心情が痛いほど分かった。しかし、何か自分の中に、モヤモヤとした感情が澱のように沈殿していくのを感じた。それは、多分「苛立ち」だ。

手紙すら出せずに、ネガティブなことばかりを考えているハリネズミ。ならばなぜ、招待状を書いたのか。それは、心の奥底では友だちを求めているからだろう。それがどんな動物であったとしても、「こんな自分」とつながってくれる友だちがほしかったのだ。私だって、本当は友だちがほしかった。望んでもかなわないことを恐れて、望まなかっただけだ。そんな過去の自分の悲しい感情に、今更ながら気づいてしまった。同時に、そんな弱さに苛立った。ハリネズミも過去の自分も、苦しいほどにもどかしかった。

私は、人前で話すことには自信が無く、一人で本を読んでいるのが好きな中学生になった。しかし、もし今の私がハリネズミだったら、迷わず他の動物たちに招待の手紙を出すだろう。動物たちが訪問してきた時に、何か失敗をしてしまったとしても、それを改善してもう一度招待するだろう。

私とハリネズミの違いは何だろうか。

ハリネズミのモノローグに、こんな言葉があった。「このハリだけの自分を素敵だと思ってくれる動物がいればいいのに。そのままのキミでいいんだよと、言ってくれる友だちがいればいいのに。」

私は思い出した。消極的でネガティブな自分だが、一方で、吃音症の私に根気強く話しかけてくれた家族や仲間、先生がいた。それに応じているうちに、少しずつ吃音症が治っていった。そして、自分を肯

定できるようになっていった。もつと自分を変えたくて、部活動に打ち込んだり、学級委員や生徒会執行部に挑戦したりしてきた。そして今の自分には、悩みを話せるよい仲間がいる。人前で話すことは相変わらず苦手だが、だからといって、必要以上に縮こまらなくなった。私が変われたのは、「大丈夫、そのままのキミで大丈夫。」というメッセージを送り続けてくれた人たちが、自分の傍らにいたからではないだろうか。だから安心して、過去の自分から脱皮することができたのではないだろうか。

ハリネズミはコンプレックスの塊だ。だが、動物たちの中には、「慎重でいい」「ハリがうらやましい」と思う者もいるはずだ。コンプレックスだって個性であって、それを抱えた上で、人と関わっていくことが大切だということだ。自分の個性をまるごと受け入れて、成りたてい自分になっていけばいい。だから、「そのままのキミでいいんだよ。」私は、コンプレックスであった吃音症を克服し、自分を肯定できるようになった。そして、さらに自分を進化させている最中である。話すことが苦手な自分だからこそ、今の自分になったと思っている。私は、ハリネズミにも自分を肯定してもらいたいと思った。

そんなある日、リスがハリネズミを訪ねてくる。「キミがよろこぶんじゃないかと思って。」そんな素敵な言葉とともに。ハリネズミの明日に、明るい日が差した気がした。

書名 ハリネズミの願い
著者名 トーン・テレヘン
発行所 新潮社